

真剣なのは畑の仕事とワインの中身だけ！あとはユーモアで笑い飛ばす！

ジェラルール・デスクランブ

(シャトー・ルネッサンス)

生産地

ボルドーはサンテミリオン村から南に 6 km ほど南下した、ドルドーニュ川沿いに、ジェラルール・デスクランブのシャトーがある。彼のシャトーは、かつてサンテミリオンのワインを船で輸出する際の重要な拠点地を担っており、19 世紀当時の出航所の写真が今でも残っている。彼はドメーヌに隣接する AC ボルドーの畑 7.5 ha を所有している。（以前は 5 km ほど北上した場所に AC サンテミリオンの畑 5.6 ha も所有していた）気候は温暖な海洋性気候だが、畑はドルドーニュ川に近接していることで、冬でも比較的気温は穏やかで霜の被害は少なく、夏の乾燥に強い。

歴史

現在のオーナーであるジェラルールの父ジャン＝アルマンは、1954 年からビオ農法を提唱し続け人で、当時農薬等を使った近代農法が隆盛を極めていたボルドーの中では異色の存在だった。2 代目となるジェラルールは父が亡くなった 1975 年、弟と一緒にワイナリーを引継ぐことになる。その当時はジェラルールが畑とコマース担当で、弟が醸造を担当していた。1995 年に弟が亡くなって以降は、彼が醸造も全て管理することとなる。父が亡くなる以前、ジェラルールは肥料を製造する会社で働いていた。当時は、バイオテクノロジーの進歩により、年々低コストで効率高の化学肥料が開発され、結果がすぐに反映される肥料がよく売れていたようだ。その一方で「バイオテクノロジーによる農業とは何か？」という葛藤がいつもつきまとい、逆説的だが、彼が化学肥料を売れば売るほど益々、彼の父が行うビオロジックに傾倒していったようだ。肥料の会社を辞めて以降は完全ビオスタイルにこだわり続ける。

生産者

現在、シャトーはオーナーのジェラルールと 3 人のスタッフで管理している（季節労働者数人が常時手伝いに入る）。彼は 7.5 ha の AC ボルドー（65%メルロー、35%カベルネフラン、カベルネソービニオン）と 5.6 ha の畑を所有している。ジェラルールはビオのビニョロンと同時に、遊び心たっぷりのアジテータでもあり、彼の煽動ぶりはボトルのエチケットによってお茶目に表現される。Wolinski や Carali、Pichon、Willem など他 22 名の著名なイラストレーターが、彼のワインを愛する友人たちで、彼のために無償でエチケットのデザインを引き受けているところも注目に値する。

ちょっと一言、独り言

初めてジェラルール・デスクランプに出会った印象は、気取りのない気さくないオッチャン！っていう印象だった。ボルドーは「スーツ姿で状態の良い車に乗っていかないと相手にされない」とたくさんの人からアドバイスをもらったにもかかわらず、ジーンズでラフな格好、おまけに今にも爆発しそうな！？おんボ口車で訪問したので、終始軽蔑されるかな・・・？なんて身構えていたが、ジェラルールに限ってはそんなことがなかった（その他の訪問ドメーヌは確かに冷たい視線の集中砲火だった・・・）。

元オーナーであるジェラルールの父親は、ボルドーではかなり珍しく、1950年代の近代農業の流れに真っ向から反する姿勢で頑なにビオロジックを続けていた。当時のボルドーはバイオテクノロジーが隆盛を極めていて、ジェラルールがワイナリーを引継いだ1970年代以降も、農業全体がまるで右へ倣えかのようにテクノロジーに迎合し、ビオはむしろ忌み嫌われる存在だったそうだ。「ビオロジックがうまく行くと、農薬や化学肥料が売れなくなるからか、昔から業者やまわりのワイナリーからずいぶん嫌みを言われ、肩身が狭い思いをしているよ」、と彼は笑っておどけながら話してくれた。

ジェラルールは父の口癖であった「良いワインは良いブドウがあってこそ」という遺言を一番の信条にしている。肥料の会社に働いていた頃から、彼は化学肥料に頼るブドウ農家の危うさを肌で感じていた。「化学肥料はブドウの収量を上げるのには効率的で、ブドウの見た目もイキイキと成長しているように見えるので、一見優れているように思えるが、実際、それに頼ってしまうブドウの樹はますます体質そのものを弱めていく。それは確かなことだ」

彼は、病気の蔓延やブドウの樹の抵抗力低下の主な原因は化学肥料によるものだと断言する。長い目でみると化学肥料はブドウの樹の本質的な力を弱めてしまうので、そのことが結果的には毎年農薬に頼らざるをえない状況を導いているという。「頭でっかちの有名シャトーがリスク極まりないと考えているビオ農法を長年続けられているのはなぜか？まわりは俺をバカ扱いするだけで、『なぜうまく行くのだろう？』という疑問すらもたない。その現状に危機感を感じる」

彼によれば、ボルドーはまだまだビオロジックの後進地域ということだ。

1995年に醸造を担当していた弟が不慮の事故でなくなり、以降、全てを管理しなければならなくなったジェラルール。醸造は弟に任せっきりだったので、その年の1年目はパニック、パニックでてんでご舞いだったそうだ。弟の造るワインがタンニンのしっかりとした男性的なワインだったのに対し、彼の造るワインは果実味を活かしたやわらかいワイン。全く正反対の個性だ。スタイルが変わったことで離れていったファンも当初は少なからずいたそうだ。彼のワインが現在のスタイルに安定するまでに3年の年月をかかったという。

「僕のワインはブドウという果物をただ漬込んでアルコールにしたシンプルなもの、種も仕掛けもない。もともとエノロジストではないから、最新の醸造技術なんて今でもサッパリ分からないよ！」と本人は謙遜するが、いやはや試飲させてもらったワインはどれもまるやかでエレガント！昨今のビオワインガイドで彼のワインが注目されているのはうなずける。

ジェラルールには、ワインを通じて22人の著名な漫画家の知人がいる。いずれも新聞雑誌等の風刺画を手がける強者ばかりだ。彼らは1970年代、ジェラルールの反バイオテクノロジーの姿勢を支持し、彼のために毎年様々なエチケットを無償でデザインしている。その数は何と30種類！まるでボルドーお堅いイメージを茶化すような遊び心満載のエチケットが並ぶ。エチケットを集めているコレクターには必見のものばかりですよ！